

Title	アカゲザルの攻撃的社会相互作用における集団間変異(III 共同利用研究 2.研究成果)
Author(s)	松村, 澄子
Citation	霊長類研究所年報 (1990), 20: 49-49
Issue Date	1990-08-07
URL	http://hdl.handle.net/2433/164156
Right	
Type	Departmental Bulletin Paper
Textversion	publisher

課題 5

ニホンザルの配偶行動の種内変異

田村 典子 (都立大)

ニホンザルの放飼群2群(嵐山群と若桜群)における、繁殖期の行動を観察した。

2グループの間で交尾行動の中でもマウント回数や、コンソート時間に差がみられたが、グループ間の変異と考えるよりも、個体差が反映されたものと考えた方が合理的である。若桜群のオスの間では、年齢、順位構成が変動したり不安定なため、緊張状態がみられた。嵐山群は順位が安定しており、オス間での攻撃行動が少なかった。

ニホンザルにおけるクー・サウンドコミュニケーションの群間変異

宮藤 浩子 (日本モンキーセンター)

ニホンザルの群れでよくきかれるクー・サウンドによるコミュニケーションは採食活動や群れのまとまりの維持、個体関係の調整などと深く関わると考えられている。本研究では、クー・サウンドコミュニケーションの実態を複数群で比較し、その一般的特徴と変異性の両方を明らかにしようとした。

観察は宮崎県幸島の2群(主群約60頭、小群約10頭)と宮城県金華山島A群(約30頭)の合計3群を対象におこなった。

幸島の大小2群で集中調査をおこない、過去の資料も合わせて分析した結果、以下のような結果を得た。

2群の共通点：(1)分散や集合(あるいは採食開始や移動)などの遊動の「相」の変化と発声やなきかわしの頻度が対応する(2)なきかわしの相手とグルーミングの相手とは一致しない。

2群の相違点：(1)小群では α ♀が積極的に α ♀が他個体の発声によく応答するものの群れの遊動を直接リードすることはない。(2)大群では α ♂がなきかわしによく参加し、見晴らしのよい場所に長時間とどまって他個体への視覚的信号となるなどして、群れのまとまりの維持に大きな役割を果たしていた。両群の違いは、群れのまとまりの維持においてきわだっており、群れのおおきさが強く関係した結果と考えられる。

一方、金華山A群の予備的調査からは、遊動中の発声頻度そのものが非常に低いことがわかった。幸島の2群と金華山群では群れの遊動に果たす音声の役割自体が異なっていると予想される。クー・サウンドコミュニケーションのあり方には、群れの大きさ以外の要因が働きうるだろう。今後は金華山島でA群をふくむ複数群を調査するとともに放飼場群での調査もおこなって、クー・サウンドコミュニケーションの変異の様相とその要因について明らかにしていきたい。

アカゲザルの攻撃的社会的相互作用における集団間変異

松村 澄子 (山口大・医短)

アカゲザルの各集団間に存在すると推定される攻撃的社会的相互作用、つまり、攻撃的音声や行動、第3者による2個体間の攻撃への介入パターンなどの生起の文化的変異を集団間で比較することが本研究の目的である。本年度は霊長研アカザ放飼群のうち、中国華群について観察を行い、同時に観察メソと、サルの音声をテープレコーダーに録音し、ソナグラムによる解析を行った。現在までに解析を終えた結果と、今後の方向及び問題点について報告する。

Screamについては、下位の個体が発する場合が大半で、body contactの有無にかかわらず同様に発声される傾向が認められた。さらに老齢で順位の低い母ザルは特に発声頻度が高く、音声の個体差が明瞭で、自分や自分の子に対する直接的攻撃の他、攻撃されるわずかな気配に際しても、機先を制するように発せられ、攻撃への移行が回避される例が多く観察された。

また威嚇音については、遠方からの録音なので発声者やシラブル数の判定が困難で、資料は少量しか集積できなかった。この点については更に方法の改良が必要である。

次年度は異なる放飼群について、今年度と基本的には同じ方法で資料を収集・解析し、群間の比較考察を行う予定である。